

山田洋次監督に聞く

標題は中日新聞9月19日朝刊「安保法成立2年」。リードから「男はつらいよ」シリーズなどの製作を通じて戦後日本を見つめ続けてきた映画監督、山田洋次さん(86)。本紙のインタビューで、表現の自由を自ら規制するような風潮を憂うとともに、先の戦争での「加害」の歴史を語り継ぐ大切さを訴えた。



「民主主義 学び直す時」の大きな見出し、「無感動な若者 元気のない国に」「消えゆく侵略の記憶 対立生む」と。第2次安倍政権発足以降の主な動き、とりわけ表現の自由を自主規制するような萎縮した風潮に警鐘を鳴らす。紹介したいことは多いが、まず若者に対する山田監督らしい「苦言」から。35年にわたり大学で教えてきた者として、「責任」を感じる指摘である。

2012年 12月	▶ 衆院選で自民党が政権復帰。第2次安倍内閣発足
13年12月	▶ 国民の「知る権利」を侵害する恐れがある 特定秘密保護法が成立
14年 7月	▶ 憲法解釈を変え、集団的自衛権の行使を容認する閣議決定
12月	▶ 特定秘密保護法が施行
15年 9月	▶ 他国を武力で守ることを可能にする 安全保障関連法が成立
16年 3月	▶ 同法が施行
17年 5月	▶ 安倍晋三首相が不戦を定めた 憲法9条への加憲を表明。9条に自衛隊の存在を明記し、2020年の施行を目指す考えを示す
6月	▶ 「内心の自由」を侵す恐れがある 「共謀罪」法が成立
7月	▶ 同法が施行
8月	▶ 自民党の高村正彦副総裁が来年の通常国会での改憲発議を目指す考えを表明

僕たち市民は、民主主義をよく学んで賢くあらねばならない、ということをしきりに思う。父親が治安維持法で逮捕された家族を描いた「母べえ」と、ナガサキの原爆が主題の「母と暮せば」は、僕にとって「撮らねばならない」映画でした。

若者が夢と希望を失った時代になったように思えてならない。学歴社会で中学、高校の時代にすでに差別化され、大学に入ると、すぐに公務員やさまざまな資格試験の予備校に通ったりするようでは、青年が人間として成長するプロセスが奪われている、としか思えない。一人前の大人が育たない国になりつつある。

いまの学生はどうして、こんなに無感動で元気がないのか。特定秘密保護法という不気味な法律が国会を通ろうとしたとき、僕らの学生時代だったら、日本中の学生が立ち上がって、大デモンストレーションが起きたでしょうね。国会前で。そういうことができる国が活力ある国だと、僕は思う。なぜ、こんなにおとなしく、聞き分けがよくなってしまったのだろう。

この国は活力を失っていると思う。国が元気である、パワーがあるということは、オリンピックの金メダルの数で測れるようなこととは違うと思います。

このままでは、僕たちの国はどんどん元気がなくなる。いまの政府が一番苦しまなくてはいけない問題だと思います。

小学校から英語を勉強するとか、コンピューターの授業をするとか、そんなことに熱心でいいのか。僕は、子どもは小さいときにはトンボやキリギリスやバッタやフナやドジョウを捕まえたり、卵を育てたり、殺してしまったり、そんな体験を持たないと、絶対にいけないと思う。つまり生命とじかに付き合う体験を持つことが大切なんです。自分の掌や足の裏で生きものの生命を感じた体験を。

戦争中に朝鮮人、中国人をばかにした。「朝鮮人」「シナ人」という言葉自体が侮辱の言葉だった。そういう時代を知っているから、いま、中国人や朝鮮人を侮辱する言葉を聞くと、胸が痛むのです。

先の戦争について教科書で、その悲惨さや日本軍の侵略の表現が年々ソフトになってきている。消えたりしている。一方、中国や韓国の小、中学生は繰り返し戦争で受けた被害について勉強しているわけだから。日本の若者たちとは当然、教育の違いからくる対立感情が生まれるでしょう。

関東大震災の朝鮮人虐殺を知らない、先の大戦の悲惨な記憶も知らない、中国や韓国の人たちが植民地時代に受けた苦しい体験も知らないという日本人と、そのことを繰り返し学んでいる中国や韓国の人たちとの間で、国民的な感情のずれが出て、当然な気がします。

(2017年9月22日)